

固定運動遊具による

幼児の遊びの発達についての実験的研究 (6)

—安全に関する理解度について—

岡本卓夫
石川豊子

△ 目 的 ▽

今日、どんな田舎の幼稚園や保育所へ行っても、すべり台、ぶらんこ、低鉄棒等々の固定運動遊具の一つや二つ備わっていないところは少ない。だが、これらの遊具による遊びにおいては、常に、彼らの安全を脅やかすような危険な場が存在しているのであって、これが遊びの指導においては、特に、安全に留意せねばならない。

ところが、実際には、子どもの活動があまりにも活発で、しかも大勢の子どもが、あつちでも、こつちでも同一遊具を使って遊ぶから、全部の子どもを十分に見守るということは、至極困難な問題であり、しばしば怪我が起きるのも、またまぬがれぬことではある。

だがしかし、それらの怪我也、教師のくふうや指導の仕方によっては、未然に防げるものも少なくないように思われる。一般に教師

は、これらの遊具による遊びを、彼らのなすがままに放任し、怪我をすればその手当はするが、予防策については、あまり真剣に考えていない場合が多いようである。

もちろん、かような怪我は、固定運動遊具自身のもつ欠陥とか、その位置の悪きなどにも起因しているとは思うが、多くの怪我は、むしろ子どもたち自身が、自己および他人の危険を防止するのに役立つ種々の事柄、例えば、遊具の使い方などを十分理解し、習慣化していないところに、その原因があるように思われる。

子どもの身体的安全を保ち、健全な発育・発達を期待するには、やはり、子どもには子どもなりの安全な遊具の使い方、遊び方を指導し、理解させていくことが何よりも大切なことである。

かようなことから筆者らは、子どもたちの固定運動遊具遊びにおいて、彼らが、一体、どの程度の安全を理解して遊んでおるかを調査

し、固定運動遊具遊びの安全な指導をする為の一資料を得んとした。

△方 法▽

一、調査期日 (1) 予備調査 自昭和三年二月二〇日

至 〆 二五日

(2) 本実験 自昭和三年一月二〇日

至 〆 二月二〇日

二、対象 徳島市F、S幼稚園児四、五、六才のそれぞれについて、男・女各五名、計三〇名。

三、使用遊具 低鉄棒、すべり台、ぶらんこ、ジャングルジム、シーソー、太鼓橋、回転台、遊動橋、雲梯、固定円木の一種。

四、観察方法

(1) 予備調査の場合 前記それぞれの遊具について、年令、性に関係なく自由に遊ばせ、その遊びの中にあらわれる安全に関することば使用と行動を調べ、さらにそれを、安全を理解しているものと理解していないものとに分け、チェックリストを作成した。

(2) 本実験の場合

それぞれ年令別に、男・女一〇名を同時に、同一遊具で五分間自由に遊ばせ、その間にあらわれたことば使用と行動の頻度を、チェックリストに記入していった。なお、新たな事柄は、そのつど記入するようにし、前記各遊具について、それぞれ観察していった。

註 「理解している」「理解していない」という分け方の限界は、筆者らが、客観的に見聞してあんな言・動は危険だなと感じた事柄は「理解していない」とし、あんな言

・動なら安全だと感じた事柄は、「理解している」というように分類したのである。

△結 果▽

一、鉄棒遊び

鉄棒遊びにおける子どもの安全に関する理解の程度は、第一表に示す如く、ことば使用では、安全を理解している方が、行動では、理解していない方が多く発生しており、全体的には、理解していない方が多い。しかして、理解していることばは、五、六才の女兒に多く、「のいて」とか「危ない」など、自分が活動の主体になった時、あるいは、客体になっていても、危なっかしい遊びをしている子どもを見た時に発せられておる。

だが、理解していない行動は、男・女の別なく、六才児に多くみられ、「やっている子どもの前・後に立っている」とか「前に友だちがいても平気でする」など、他の子どもからの危険や他の子どもへの危険ということに関しては、無意識的な行動、いわゆる自己中心の行動が多いようである。

かく考えてみると、結局、鉄棒遊びにおける彼らの安全に関する問題については、年少児の場合には、比較的心配することもないうに思うが、年長児の場合には、活動の活発性と自己中心性が相まって、わずかにもっている安全意識も、しばしばそれによってうちけされ、第一表に示す如き、危険な行動がしばしば起きておる。

したがって、これが遊具での安全な指導をするには、特に年長児に対して具体的な使用方法(例えば、同じ側からとびつのが安全だ

第 1 表 鉄 棒 遊 び

分 類	項 目	4 才		5 才		6 才		計		
		男	女	男	女	男	女			
理解している	ことば使 い	危ない、足があたるぞ	1		1		1	1	4	
		そこのいていて						2	2	
		そんなにしたら危ないわよ		1		3			4	
		こっちからしないと危ないわよ	1		1	1			3	
		計	2	1	2	4	1	3	13	
	行 動	足を持って上げてやる	2	1	2		1		6	
		計	2	1	2	0	1	0	6	
		理解していない	こ使 とば い	手ばなししてやろう		1				1
				計	0	1	0	0	0	0
			行 動	やっている者のすぐ前にいく				1		3
懸垂している子をゆする							2		2	
やっている子のすぐ後に立っている すぐ前に友だちがいるのに平気で とびついたり回ったりする	1				1		1		3	
3人がせり合いながらとびつく	1	1		1	2	2	6			
計	2	1	2	2	5	8	20			

ということなど)を説明しておくことが必要である。また、その他一欄の人数を決め(二人ずつにする)ておくとか、あるいは年令別
に使用欄を決めておくとか、鉄棒の前・後に「サク」をつくったり
しておくことなどが大切な事になってくると思う。

二、すべり台遊び

すべり台遊びにおける子どもの安全に関する理解の程度は、第二表に示す如く、ことば使いの面ではいづれともいえないが、行動では、理解していない方がはるかに多く、全般的に、理解していない方が多いといえよう。

しかし、理解していることばは、六才男児に多く発せられており、鉄棒遊びの女児においてみられた如く、「危ないぞ」とか「いくぞ！」など、自分が活動の主体になった時、そしてそれによって、他の子どもに危険を与えそうだと思う時に発せられている。だが、理解している行動は、一般に女児の方が多く、男児と同じ立場において、女児の場合は、それを行動面にあらわしている。

また、理解していない言・動は、五、六才男児に多く、「早くすべれ」とか「のけ！」など、自分が早くすべりたいが故に、他の子どもを追いたてようとするこぼや「手ばなしすべり」とか「台を逆
に上がっていく」あるいは「台の途中から下りる」など、他の子どもにも与える危険ということより、先ず、自己のスリルを味うといった、いわゆるスリリングな自己中心的行動が多いようである。

かく考えてみると結局、すべり台遊びでは、年少児や女児の場合には、比較的危険に対する心配も少ないように思うが、五、六才の年長の男児が遊ぶ場合には、注意しておくことが必要であろう。すなわち、ことば使いの面では、女児より安全意識をもっているように思える男児も、実は、活動が活発なるが故に、それに関することばを發する機会が多いということであって、彼ら本来の活動的、自己中心的傾向は、しばしば危険なことば使いとなったり、そ

第 2 表 す べ り 台 遊 び

分 類	項 目	4 才		5 才		6 才		計	
		男	女	男	女	男	女		
理 解 して いる	こ と ば 使 い	順番にすべるんだよ				1		1	
		そこからあがってきたら危ない				1	1	2	
		危ないノ ちょっと待って			1	1			2
		のいてないと危ないぞ			1		2		3
		今度はぼくの番					1		1
		もう少しのいていてよ						1	1
		いくぞノ			1		2		3
		まだまだ	1						1
		計	1	0	2	1	8	2	14
	行 動	先にすべったものがのいてからすべる		3		2	1	2	8
下でたまると途中で止まって待つ						1		1	
計		0	3	0	2	2	2	9	
理 解 して いない	こ と ば 使 い	目をつむってこいよ				1		1	
		早くすべて		1	2		1		4
		反対向きですべるぞ	1				1		2
		手ばなし、これサーカス			2				2
		こいつをひっぱれ					1		1
		のけノ はやく下りろ			2		1		3
		計	1	1	6	0	4	1	13
	行 動	登っている前の子どもをひき下ろす					1		1
		片脚でのぼる						1	1
		途中からすべり下りる			4		1		5
		追い越してのぼる			1				1
		手ばなしで縁をすべる			3				3
		台上でけんかをする					2		2
		後から背中をける					1		1
		すべりつつ後の子どもの足をひく					1		1
		大勢がくっついてすべる					3		3
		すべり台を登っていく			1		2		3
		登り梯子の手摺をすべる	1		1		1		3
		両脚を外側に出してすべる		1			2	1	4
計	1	1	10	0	14	2	28		

れ以前の危険な行動になる場合が多くなっている。

したがって、これが遊具での安全な指導をするには、特に、五、六才男児に、すべり台の安全な使い方、遊び方、例えば、五、

もをあまりせかせかせないとか、逆に上がっていかないようにさせることなどを十分指導すると同時に、年令別あるいは性別に使用すべり台を決めておいてやるなどの配慮をすることが大切になるのではな

いかと思われる。

三、ぶらんこ遊び

ぶらんこ遊びにおける子どもの安全に関する理解の程度は、第三表に示す如く、ことば使いでは、理解している方が、行動では、理解していない方が多くなっているが、全体的には、理解、不理解両

者ほぼ半々といったところだが、それらの類数は、他の遊具におけるそれよりは多く、これでの遊びには、相当危険な場面が存在しているように思う。しかして、理解している言動は、い

ずれの年令においても、男児より女児の方が多く、「ちょっと待って」とか「乗り下りをゆっくりする」など、他のこともに与える危険というより、先ず活動の主体になった自分の安全に注意しており、女児特有の用心深さがでていられるに思われる。しかしてこれらは、年令的に差異は認められない。

ところが、理解していない言・動をみるに、年令的差異に関係なく、いずれの年令においても、女児より男児の方がはるかに多く、中でも、「後に注意せずにいる」とか「ゆつてる後で気づかず立っている」など、自己中心的危険な行動が、全体の五割以上をしめておる。

かかる危険な行動は、彼ら本来の自己中心的傾向の上に、さらに、この期の男

児の活動が活発になってくるのと、この時代には、まだ物理的な空間知覚が十分発達していないので、ぶらんこ遊びでは、どんな場合が危ないかということがわかっていないということなどが、かかる危険な行動の原因ではないかと思う。

かく考えてみると、ぶらんこ遊びでの安全な指導をするには、先ず、ぶらんこの物理的理論を、彼らによくわかるように実例を通し

第3表

分類	項目	4才		5才		6才		計	
		男	女	男	女	男	女		
理解している	ことば使い	立ゆりしたら危ない		1		1			2
		後にいると危ないぞ	1						1
		Tちゃん危ないのい		1					1
		ちょっと待って		3		2		2	7
		2人のりはいけないのに	2			3	1	2	8
	計	3	5	0	6	1	4	19	
	行動	調子をととのえてゆっくりにる	2	4	2	4	4	3	19
		ゆれているぶらんこをさけて通る		1		1		2	4
		とび下りないでゆっくりにる	2	4	3	4	0	3	16
		計	4	9	5	9	4	8	39
理解していない	ことば使い	2人のりせんか	1		2		2		5
		早くのいて(のけ)				1	1	2	4
		計	1	0	2	1	3	2	9
	行動	ぶらんこからすべり下りる			1				1
		ゆっている後で気づかず立っている	2	1	1	1	2		7
		大きくゆる			1		3		4
		ゆっているのを急にとめる	1			1		2	4
		綱にぶら下がつてゆる	1						1
		後に注意せずにゆる	6	4	5	2	3	1	21
		ゆれているのにとび下りる			1		2		3
		走ってきてとびのる			1				1
		綱をねじってゆる			1				1
		ゆりながら足を左右にぶらぶらぶり回す	3		1		1		5
計	13	5	12	4	11	3	48		

て平易に教えてやり、そのゆり方や見方を十分理解させることが大切である。特に男児にはこれを徹底させねばならない。さらには、男・女の使用時間を決めてやったり、男・女別にぶらんこを決めておいてやるなども考えられる。また、ぶらんこの前・後に、立入禁止の「サク」をつくってやるどうか、ぶらんこの間隔を開けておいてやるなども、この遊具での安全指導において大切なことと思われる。